歌の周辺

秋、コスモスの花が咲くと、風がひんやりと金属の響きを帯びてコスモスの花々を越えてゆく……。これは〈見た風景〉ではなく、〈見たい風景〉（心を反映させた風景）を詠んだ歌である。時々そういう作り方をした。

四句目の「冷や冷やと」は「ヒヤビヤト」と発音する。「冷え冷えと」の意である。なぜ「冷え冷えと」とせず、あえて「冷や冷やと」としたのか？　それはたぶん直感的にア行の音（おん）を増やしたいと思ったからであろう。「冷え冷えと」ならばア行音は一首で合計11個だが、「冷や冷やと」にすれば合計13個になる。

（高野公彦）

（写真・木畑紀子）

高野公彦うた紀行・19

コスモスの花咲けば花を越ゆる風あな冷や冷やと鉄（かな）ひびきする

――『汽水の光』

【鑑賞】「冷や冷や」、「鉄ひびき」に、秋の空気の透みきった感じがある。が、「冷や冷や」に予想以上の冷たさが、「鉄ひびき」に無機物のもつ違和感があり、どこかネガティブだ。「あな」と作者も驚きを隠さない。ふるさとのコスモスを吹く風ではなく、上京して住んだ都市近郊の風だろう。「肩ぐるま」の一連の一首目にあり、当時の内面の陰影を暗示している。

（水辺あお）

バイカオウレン

ふるさとコレクション――190

金峰神社（高知県高岡郡佐川町）

朝ドラが，牧野富太郎博士を主人公とする「らんまん」と決まってから観光客でごった返していると聞く佐川町だが，もともと牧野博士を敬愛する土地柄で，植物に関する資料をはじめとして，博士を偲ぶさまざまのものを大切に保管しており，建築物も移築や補強をしながら，町のあちこちに存続している。金峰（きんぽう）神社もその一つであり，牧野富太郎少年に関る神社が古びて新しいものが必要となったとき，壊すのではなく，遺したのである。杉木立を貫く急峻な石段を登りきると新，旧の神社は近々と並んでいる。後方の神社は前面に一対の龍の彫刻を飾り，全体的に繊細な印象だが，金網で厳重に守られている。地域には「悪さをしたら天狗が来るぞね」という言い伝えがあるそうだが，ほんとうに天狗の宿のような，深い木立のちょこっとした空間に神社は在るわけで，庭といえるような地面も狭い。しかし，ここで少年はバイカオウレンを見つけたのである。植物学へのスタート地点として，少年を癒した懐として，金峰神社と木立は大切な処として長く遺されていく。

（写真・解説　黒岩やよえ）